

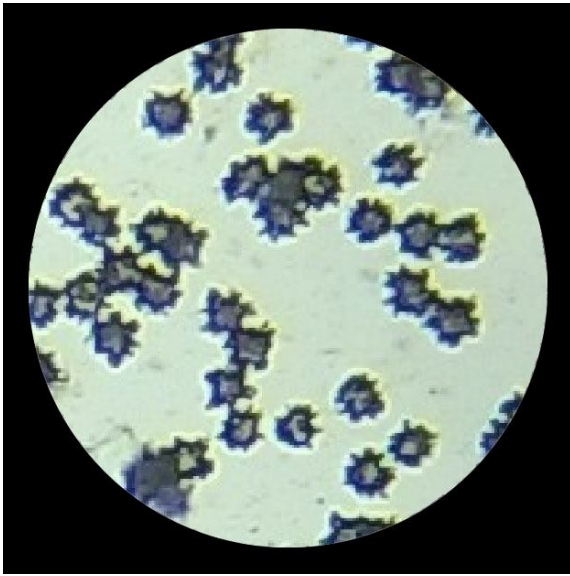
「ヤグラタケ (5)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

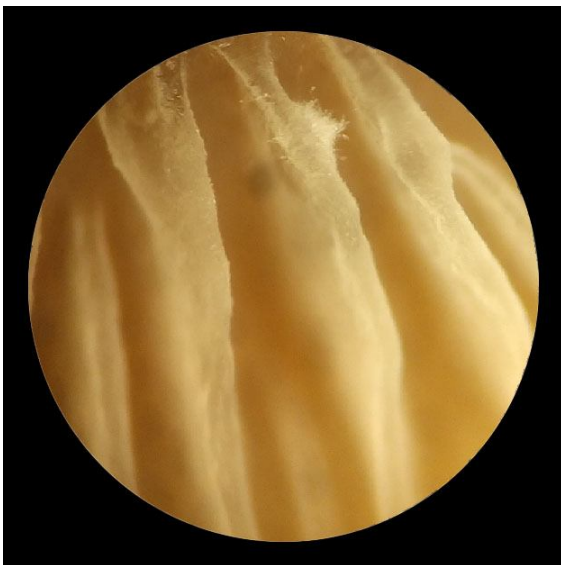
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

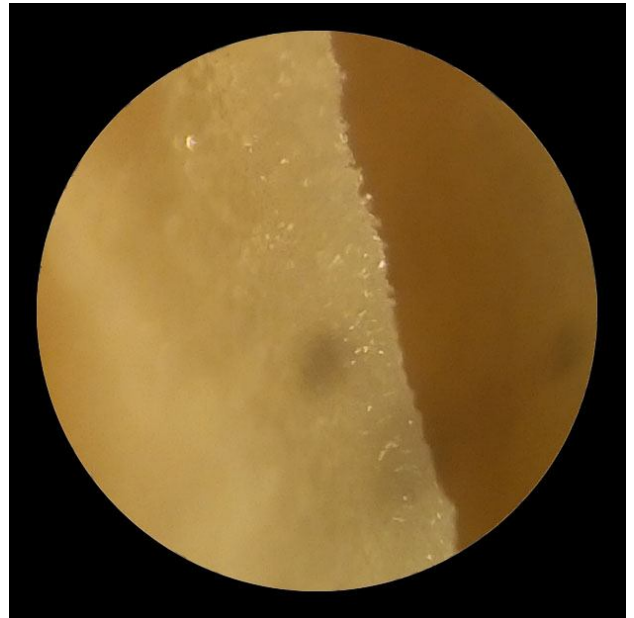
ほとんどのキノコは、傘の裏側の「ヒダ」にある「担子器」と呼ばれる突起で大量の胞子をつくり、主として風で運搬される。いわば「風媒胞子」と言える。しかし、ヤグラタケは傘の裏側のヒダにはほとんど胞子が形成されず、傘の菌糸が直接変化した「厚膜胞子」と呼ばれる特殊な胞子を大量に作る。



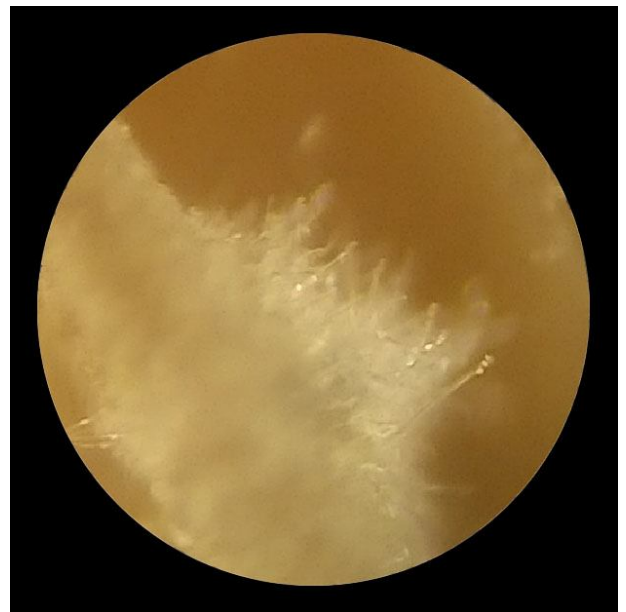
ヤグラタケの厚膜胞子は、多くの突起を持っている。アサガオの花粉にそっくりである。これは、虫やカエルの脚に付きやすくする為の進化だろう。ヤグラタケの胞子は、いわば「虫媒胞子」と言える。



傘の裏側のヒダも顕微鏡で観察してみた。小型菌にしては比較的肉厚のヒダが並んでいる。(×100)



400 倍まで倍率を上げて、ヒダの周縁部を観察してみた。普通のキノコなら、この倍率でヒダを見ると、胞子がびっしりと付いている。しかしヤグラタケでは、胞子はおろか担子器すらほとんど見えない。どうやらヤグラタケは、担子器で有性的に胞子を作る方法を捨てて、主として、通常の菌糸から無性的に胞子を作る方法に進化したようだ。従って、傘の裏にヒダはあるものの、それはほぼ痕跡的な存在なのだろう。



しかしヒダで胞子が全く作られていないわけではない。よく探すと一部に毛状の担子器ができ、小さな胞子も見られた。胞子は厚膜胞子とはちがって、トゲのない全縁で、サイズもずっと小さい。

ヤグラタケの宿主(しゅくしゅ)のクロハツは、狭い範囲に群生(または輪生)する。虫によって近くのクロハツに厚膜胞子を拡散させると同時に、風媒胞子で遠くに胞子を運ぶ姿も残しているのだろう。